

◆◆心身と自然との調和にとって必要な里山◆◆

1) 観光バブルの京都より滋賀の里山

先日、県外から来た友人を「里山」に案内しました。京都に来た友人は、観光ブームに沸く京都より滋賀の「里山」へ行ってみようという。「里山≒山里」ぐらいにしか思っていなかった私は、取り合えず「滋賀 里山」でググってみると「オーレリアンの庭」というのがヒットしました。

なんでもラテン語で「蝶好きの庭」という意味らしい。虫好きの彼には良いかとも思い場所を探しましたが、どうも所在を公開していないらしい。比叡山の西側の山裾あたりで見当をつけて行ってみることにしました。

2) 集落<段々畑<森の三層構造が大切

比叡山の山裾と言っても広いが、段々畑の裾のほうから山側を見上げると、耕作地と森の境界のあたりをパノラマ写真のようにワイドに眺めることができました。

高低差で言うと、低いほうから集落<段々畑<森という風に左右に帯状に広がっているのですが、大体的見当をつけて段々畑と森との境界あたりに行ってみました。

刈り取りの終わった段々畑では、ヒトと出会うことはほとんどありませんでした。

森と段々畑との境界に沿っては未舗装の農道がくねくねと入り組んでおり、その両側にほとんど切れ目なく防獣柵が張り巡らされていました。シカ、イノシシ、サルの被害を避けるためか、そのほとんどが電気柵でした。

3) 里山の動植物の多様性

農道と森の際は、ヒトの手が入っていないところはクズやササがはびこって踏み込むこともできませんが、ヒトの手が入っているところは土が露出しており、11月中旬というのに蝶が何頭も、土手に沿って飛んでいました。土手には、リンドウ、ヤクシソウ、ウメバチソウ、ツリガネニンジン、サワヒヨドリなどの薬草が咲いていました。一昔前によく見た里山の景色です。

放置された山林や休耕地と違って、薪割りやキノコ採りなど、一定の管理が入っている雑木林は、多様な動植物があり、風通しもよく明るい。それに対して、放置された山林や休耕地は鬱蒼として暗く、動植物の種類も少ない。そんな印象でした。

里山≒山里ぐらいにしか思っていなかった小生ですが、今回、「里山≠山里」であることを私なりに理解しました。

4) 持続可能な里山への期待

今回訪れた里は、生産緑地としてだけでなく、おそらく「オーレリアンの庭」という目的で人の手が加わった地域と思われますが、実は漢方薬材料の多くもこうした二次的自然地域に多いのです。

国土の4割が里地里山と言われていますが、例えば京都市北部などはほとんど見ることもできず、滋賀県でさえ「集落<段々畑<森」という帯状の景観を見れるところは少なくなっているのではないのでしょうか。これから「松茸山の再生」や「オーレリアンの庭」のような取り組みが、持続可能な自然環境の利用として広がっていくことに、個人的には期待したいと思います。

(虫の一分)

